

授業名	アジア研究入門	授業形態	オンデマンド
Name of Course	INTRODUCTION TO ASIA		
担当教員氏名	岩井 美佐紀		
期間・曜日・時限	2026年度後期	集中講義／曜日時限のない科目	
配当学年	1年		
単位数	2.0単位		
科目ナンバリング	ARE111		

使用言語/Language	日本語
履修条件/Course Requirements	
授業の目的/Course Descriptions & Objectives	
①授業のテーマと概要/Course Theme and Outline	一言に「アジア」と言っても、ひとくくりにはできない国家政治体制の違い、経済発展の違い、社会構造の違い、文化的多様性、話されている言語の多様性などがある。本講座では受講生が、この多様性を有する「アジア」という地域にアプローチする視座を獲得するのに必要な基礎知識を教授する。
②授業の目的と到達目標/Objectives and Goals	1) 受講生が本講義を受講しアジアに関する幅広い知識を身に付けその多様性を理解することでこの「アジア」という地域にアプローチする視座を獲得することを目的とする。(DP1) (DP3)
③授業形態/Course Format	講義の性格上オンデマンド型授業とする。
④準備学習とその時間/Preparation Study and Amount of Time	準備学習（テーマに沿った予備知識・情報の収集）：1.5時間 復習時間（講義内容の振り返り・論点整理）：1.5時間
英語抄訳/Abridged Translation in English	Asia is not an integrated area but an area consisting of different political states, different economic developments, different cultural systems, and different languages. The aim of this lecture is to obtain a broad perspective relating to the area of Asia and its various diversities.

サブタイトル/Subtitle	「アジア」の多様性を理解する
授業の計画/Lecture Topics	
第1回	東アジア：浜之上幸先生 「韓国語とはどのような言語か・・・日本語と対照して考える」 本講義は、韓国語の文字、音声、文法、語彙などについて、特に日本語との対照にスポットを当てつつ考察していく。ハングルという独特な文字の形成、日本語にはない独特な音声、日本語に似た助詞の使用や用言の活用、日本語と似た文の構造、語彙の約半分を占める日本語に似た漢字語などが主なトピックになる。
第2回	東アジア：林史樹先生 「韓国・朝鮮の文化と社会をいかに理解するか」 朝鮮半島という地域を文化的な側面から理解する上で、基本とされる事柄や注意すべき点を紹介する。韓国語専攻では、韓国文化概論、韓国の宗教・社会、韓国文化特定研究という講義を担当しているが、そこで伝えていく事柄をおおまかにまとめたい。また適宜、調査時のエピソード、周辺地域の事柄を引き合いにだしながら講義を進めたい。
第3回	東アジア：柳在廣先生 「韓国の社会経済の今を理解しよう」 本講義では、2000年以降の韓国における社会経済の変容を概観します。IT産業の台頭やデジタル化の進展がもたらした経済成長、さらには貿易構造の変化と海外直接投資の拡大について解説します。 あわせて、超少子高齢化や高学歴化に伴う若年層の失業問題など、韓国が直面する深刻な社会課題にも焦点を当てます。最新のデータをもとに、隣国・韓国の「今」を多角的に読み解きます。
第4回	東アジア：植村麻紀子先生 「中国語とはどういう言葉か（1）」 中国語の母語話者は、中国・台湾・シンガポール・マレーシアなどを中心に世界に10億人以上いる。しかし、中国に限っていても、国土面積は日本の約26倍、いくつもの方言があり、独自の言語を持つ少数民族

	<p>も少なくない。</p> <p>本講義では、中国の標準語である“普通話”の音韻体系、文字、基本的な文法を中心に、新語や外来語なども紹介する。</p>
第5回	<p>東アジア：青野英美先生</p> <p>「中国語とはどのような言語か（2）」</p> <p>本講義では、「中国語とはどのような言語か（1）」に基づき、文字・語彙・文法の特徴を基礎として、中国語の量詞、外来語、敬語、四字成語を取り上げる。これらの言語現象の分析を通して、中国語の構造的特性と中国文化との関連性を考察することを目的とする。中国語学的視点から、中国語が人々の思考様式をどのように反映する言語であるかを明らかにする。</p>
第6回	<p>東アジア：菊地秀樹先生</p> <p>「現在の日中関係について理解する」</p> <p>本授業では、日本にとって経済的にも地理的にも重要な国である中国との関係について講義を行う。日中関係の安定化は、隣国同士である両国にとって重要であるはずだが、近年その関係は悪化の一途を辿っている。本講義では、日中双方がこれまでどのような思惑に基づいて相手国に向き合ってきたかを整理する。そのうえで、今後の日中関係を考えるうえでどのような課題が両国にあるのかを考える。</p>
第7回	<p>東アジア：大宅利美先生</p> <p>「中国文学史の基礎知識」</p> <p>中学高校で学ぶ「漢文」は中国古典文学のごく一面に過ぎない。中国古典文学の使用言語は文言(書き言葉)と白話(話し言葉)に大きく分けられる。いわゆる「漢文」は文言を指し、時代的地理的变化が少なく訓読できる。白話は時代や地方によって語彙や文法が変化し、訓読は難しい。日本でも人気の『西遊記』『三国演义』『水滸伝』などは実は白話文学である。今回の講義では白話文学を含めた中国文学史の全体像を概観する。</p>
第8回	<p>東南アジア：春日淳先生</p> <p>「ベトナムで話される諸言語」</p> <p>ベトナムには50を超える多数の民族が居住し、それぞれの民族が固有の言語をもつ。その中で、ベトナム語は、ベトナムの国語でありすべての民族の共通語であるが、キン族という民族の母語でもある。本授業では、ベトナムに話される諸民族の言語について、系統関係、類型論的な特徴、文字使用等の視点から概説する。</p>
第9回	<p>東南アジア：岩井美佐紀先生</p> <p>「ベトナムの民族と文化」</p> <p>ベトナムは中国とインドの間に位置し、両文明の影響を多分に受けてきた。ひとつには、東アジアの儒教文化圏として漢字を受容し、中国式の仏教寺院も多くみられる。一方で他の東南アジア諸国と同様、インド文明も積極的に受容し、中部や南部にはヒンドゥー教寺院やモスクも見られる。民族の十字路口とも呼ばれるこの地域の文化的多様性を中心に講義を進める。</p>
第10回	<p>東南アジア：富岡裕先生</p> <p>「タイ(Thai)語とタイ(Tai)諸語」</p> <p>タイ語と聞くと、多くの受講生はタイ王国のことば(いわゆる Thai)を思い浮かべるのではないかと。しかし、「Tai」と表記すると、タイ(Thai)語だけでなく、タイの隣国のラオス語、ミャンマー・シャン州で主に話されるシャン語などを含む「タイ諸語」を表すことになる。</p> <p>本講義では、タイ語とタイ諸語の違いについて学びつつ、タイ諸語を事例として東南アジア大陸部の言語の多様性について触れる。</p>
第11回	<p>東南アジア：和田理寛先生</p> <p>「ミャンマーと移民」</p> <p>母国を離れて暮らすことはどのような経験でしょうか。ミャンマーは1988年と2021年の2回、大きな政治的変動をきっかけに多くの人々が国外へと脱出しました。この授業では、それぞれの時代、日本とタイに移り住んだ人びとの半生をなぞることで、忘れつつある紛争を身近なものとして考えます。</p>
第12回	<p>東南アジア：ダヴィド・ムルヤディ先生</p> <p>「インドネシア語の歴史」</p>

	<p>インドネシア語はかつて「マレー語」と呼ばれ、オーストロアジア語族に属する。マレー語は現在インドネシア、マレーシア、シンガポール、ブルネイなどで話されており、オーストロネシア語族は千前後の言語から構成され、北は台湾から南はニュージーランド、西はマダガスカルから東はイースター島までと広く分布している。本講義では、オーストロネシア語族から古マレー語、古典マレー語、現代マレー語（インドネシア語）にかけて、言語学の観点から概説する。</p>
第13回	<p>東南アジア：高地薫先生</p> <p>「インドネシアにおける民族の多様性と国民文化」 インドネシアは600以上の民族と言語を抱える他民族国家であり、多様な民族や文化がインドネシアという国民としてまとまっています。そのため独立以前から来たるべき「インネシア」という民族・国家の文化のあり方が議論がされてきました。本講義では、インドネシアのナショナル・コスチュームとなったパティックという布、そしてそれを使ったシャツを取り上げて、国民文化がどのように生成されるのかを議論します。</p>
第14回	<p>東南アジア：伊藤未帆先生</p> <p>「東南アジアの歴史」 歴史的にさまざまな大文明の影響を受けてきた東南アジア。人々は、これらの大文明に飲み込まれるのではなく、自分たちの土着文化を守り、ときに変容させながら、生き残るための試行錯誤を重ねてきた。本講義では、民族、宗教、文化といったキーワードをもとに東南アジアの歴史を紐解きながら、東南アジアで生き抜いてきた人々の工夫のあり方について考えてみたい。</p>
第15回	<p>東南アジア：鈴木良枝先生</p> <p>「東南アジアにおける音楽文化 — 青銅楽器の音色と信仰について—」 青銅のゴング（銅鑼）やメタロフォン（鉄琴・青銅琴）は、東南アジアに広く普及し、この地域の代表的な音楽文化として知られ、人々の生活や信仰と密接に結びついている。本講義ではタイ、ミャンマー、ベトナム、インドネシアにおける青銅楽器の音階、演奏方法や舞踊について概観する。またインドネシア・バリ島の合奏形態であるガムラン楽器の制作過程と調律方法に注目し、東南アジアにおける青銅の音色の価値観について理解を深める。</p>
テキスト/Textbooks	
参考書/Reference Books	
成績評価の方法/Grading	毎回の授業のリアクションペーパー、小テストなどを総合的に評価する。
その他/Additional Comments	<p>参考書については各回の担当教員からオンデマンド授業において必要に応じて提示されます。</p> <p>この授業では、Google Classroomを使用します。クラスコード[tqo3lqla]</p>
注意事項/Instructions to Students	<p>本講義は、アジア言語学科1年生の学科専攻指定の必修科目で、完全オンデマンド（曜日時限指定なし）の形式となっています。</p> <p>履修登録画面に「集中講義選択」というボタンがありますので、こちらから登録してください。詳しくは、学年暦冊子『2.WEB履修登録の方法について』に掲載しています。</p> <p>本講義はオムニバス講義形式となっており、毎回登壇する先生が交代します。</p> <p>毎週水曜日午前9時に講義資料と課題がGoogle Classroomを経由して出されます。講義資料や課題の形式は各担当の先生によって異なりますので、その指示に従ってそれぞれ対応してください。</p> <p>課題の提出期限は1週間後の水曜日の午前9時となります。 例えば、第1回授業の講義資料と課題は9月16日（水）午前9時に配信され、リアクションペーパー・課題の提出期限は9月23日午前9時です。 期限厳守で提出してください。</p>
参考URL/Reference	
実務経験/Work Experience	